



ベビー・ビー「山ぐるみ人形劇マクベス」



朗読桜通り亭 第三夜
オブジェクトパフォーマンスシアター「乱歩万華鏡」



劇作家とつくる人形劇「わらの骨」
(作・演出:渡山博榮)

私の人形劇 トピックス2015

私にとって今年の人形劇公演のトピックスは、何といっても、初めて参加した8月の「いい人形劇フェスタ」であった。うわさに聞いていた、飯田市の町を挙げての取り組みを目の当たりにし、長い年月、大勢の人がこのフェスティバルを積み重ねてきたことを実感した。そして今年の特集が「愛知の人形劇」であり、上演した諸作品によって、全国の人形劇の中での愛知の先進性が示されたことも、強く印象に残った。

人形劇は人形を遣って物語を展開するのが基本だが、今やその人形の形象や素材が自在になり、表現の可能性を広げていることは周知の事実だ。フェスタでもそのような作品をいくつも目にした。人形劇は今、表現手法の花盛りである。中でも愛知が群をぬいていたように思えた一つは、「P新人賞」の四作品がその新しい可能性の見本市であり、特にベビー・ビー「桜の森の満開の下」(原作:坂口安吾、構成・演出:根本コースケ)のユニークさが目を引いたこと。もう一つはオブジェクトパフォーマンスシアター(OPT)の「胎児の夢〜グラ・マクラより」(原作:夢野久作、演出:木村繁)が、素材や表現の新しさだけでなく、物語としてもこれまでにない領域に踏み込んだからだ。両者ともひまわりホールが育ててきたプロジェクトだ。私は飯田で、ひまわりホールの果たしてきた役割を、改めて思い知ったといえる。



時代横町 春ノ巻2015 六十八丁目「宿衛」

そして、10月のベビー・ビーの「P新人賞」受賞記念公演「山ぐるみ人形劇マクベス」(原作:シェイクスピア、演出:根本コースケ)と、11月のOPTの新作「乱歩万華鏡」(演出:木村繁)をひまわりホールで見て、その先進性を再確認した。ベビー・ビーの人形劇は、山さきあさ彦製作のぬいぐるみ人形を遣う。まずはすっとほけた人形ありきだ。動かないし役柄も表現しない。むしろ物語を裏切る可能性もある。それでもなお「マクベス」全幕を力強く見せきった。それは、役や楽器の演奏を次々スイッチするなどの独特の演出力によるのだが、人形という側面で見れば二つのことが見えて来る。一つはこの人形が物語を相対化すること。もう一つは「依り代」としての役割だ。前者は現代演劇的視点であり、後者はそもそも人形劇が誕生した発端の形態だろう。この二つを組み合わせることによって、ベビー・ビーのユニークさがあった。

そして「胎児の夢」につづくOPTの「乱歩万華鏡」が示したのは、江戸川乱歩という素材を得て、グロテスクな物語の領域に踏み込んだことだ。人形劇が子供のための表現として積み重ねられてきた歴史を見れば、この人間の暗部の表現は一種のタブーだったように思う。しかしおとぎ話や昔話の原型には、本来残酷さやグロテスクさがあったとされる。それらは物語の原初的要素の一つなのだ。そして今回の舞台でも、グロテスクや恐怖が想像力を刺激し、笑いや美に転化する瞬間があった。濃い影による光の強さだ。その方向は、人形劇の表現の幅を確実に広げると思う。このほかにも、春と夏のひと組「時代横町」シリーズ(作・演出:麻酔けい子)は、15年の年月を重ねながらマンネリに陥ることなく、語り口と表現力の充実ぶりが見ごとだった。また6月の「劇作家とつくる人形劇」も今後の積み重ねに期待したい。

安住恭子(あずみきょうこ)
演劇評論家。読売新聞記者を経て、以後中田新聞、「演劇界」「げき」「シアターアーツ」などに演劇評論を執筆している。著書「草紙の那美と辛亥革命」(白水社刊)が第二十五回和辻哲郎文化賞を受賞。



ワークショップで講義を行うFred Thompson氏



ワークショップで製作体験中のたかはいちげん

National Puppetry Festival 2015 海外フェスティバル レポート

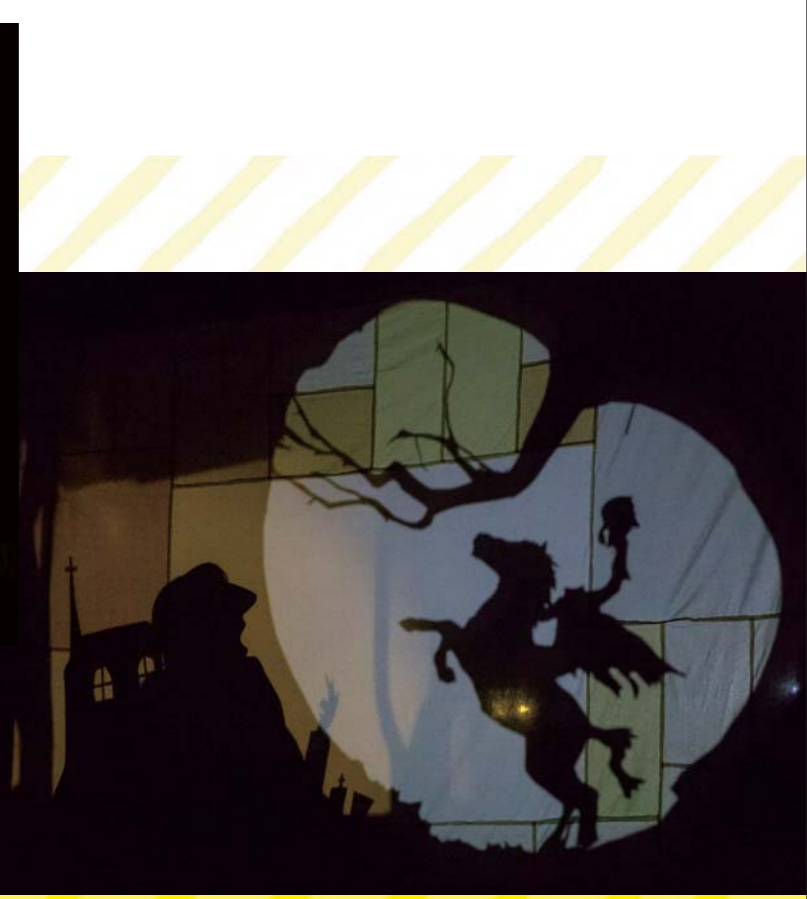
8月10日から15日までの6日間にわたって催されたアメリカの「National Puppetry Festival 2015」に初めて参加しました。1936年に始まり現在は隔年で開かれているこのフェスティバルは、今年で63回目になります。主催はPuppeteers of Americaというアメリカ・カナダの100あまりのプロ劇団と多くの人形製作者、教師、図書館員、セラピスト、アマチュア劇団、愛好家による80年近くの歴史を持つNPOです。会場はアメリカ国内の大学を持ち回り、今回はコネチカット州立大学という医療、芸術系(人形劇のミュージアムや大きな工房・スタジオまである)を含む巨大な総合大学です。

このフェスティバルは日にちと時間帯でいくつかのパートに分かれています。初日の8:00~15:30の「Professional Day for Teaching Artists and Therapists」という人形劇を用いた(幼児)教育や療養、つまり「人形劇でABCを教えること」から「自閉症の子どもへの人形劇によるアプローチ」までの研究発表(休憩・昼食を合せて30分×12人)と2日目から5日までの午前中、延べ8コマの時間帯で、選択して受けられる人形の製作・操作、衣装、身体表現、影絵、ショービジネスなど31のワークショップ(私はFred Thompson氏のマリオンネット製作とMichael Schupbach氏のfoam-patterned puppetを受講)はこのフェスティバルの大きな特徴です。

人形劇の上演はほとんどアメリカ国内(他にカナダとブラジル)の劇団で全部で30演目くらい。フランスのシャルルビル=メジエールのフェスティバルのような前衛(先鋭)的な演目は少なく、どちらかというと従来の手法をより洗練させた、あるいはショー的な演目が多いです。Little Did Productions(ニューヨーク)の「Eli the Luthier」や



Little Did Production(ニューヨーク)「Eli the Luthier」
photographer:Jane Clausen



Drama of Works(ニューヨーク)「Sleepy Hollow」
Nik Palmer www.fotonik.co.uk

Le Théâtre de Deux Mains(カナダ)の「The Swan」、Drama of Works(ニューヨーク)の影絵「Sleepy Hollow」などが印象的でした。2、3回上演する劇団もあるので、時間をやりくりすれば全部見られます。午後は大学の教室で小さな演目を見て、夜は大きなホールで参加者全員が同じ演目を観るかセレモニーに参加。日によってはその後も深夜1時からまで、フリンジシアターやバブが開かれます。2日目の夜はさながら「セサミストリート」祭。多くのキャラクターの生みの親であるJim Hensonの娘Cheryl Hensonが講演。後半はビッグバードのマベット操演者Carol Spinneyの映画の上演とご本人が妻Debraとともに登壇。「セサミストリート」がアメリカの人形劇の中でどんなに大きな存在なのか、レジェンドを目の当たりにしてしみじみ感じた夜でした。最終日の15日は、バラードや野外での上演が主で、近所の人たちも大勢観に来ていました。

宿泊と食事は大学内の施設かホテルで、大学内の移動はシャルバスやボランティアによる車が出たり、工房やスタジオの見学、パーベキュー大会、フィルムフェスティバル、情報交換会、兎にも角にも盛りだくさんで組織的で、いかにも「アメリカ的」だなあと。そして、アメリカの人形劇も面白いと思いました。

たかはいちげん
人形劇団わたぐも所属、愛知人形劇センター広報部長、P新人賞選考委員。東海地区を拠点として、人形劇の発展や人材育成に尽力している。



Le Théâtre de Deux Mains(カナダ)「The Swan」



研究発表会「Professional Day for Teaching Artists and Therapists」の様子